

令和4年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

令和2年から蔓延している新型コロナウイルス感染症により、途切れかけた伝統を何とか繋ぎたいと考え、できる限り、コロナ前の状態に戻すよう取り組んだ。アメリカ研修、中国東北育才学校との交流は実施できなかったが体育大会やコーラスコンクールなどの学校行事をはじめ、ほとんどの活動を行うことができ、かろうじて伝統が繋がったと感じている。

今年度から三つの方針（スクール・ポリシー）を掲げ、指導を行った。主体的に学習を進め、自らの進路を切り拓いていく力を育てるとともに、学校行事や部活動を通して、豊かな人間性を育むことが本校の目標である。

昨年度SSH事業Ⅱ期3年目を終え、昨年3月に文部科学省から評価をいただいた。「多くの活動の検証、中間まとめが行われており、今後の成果も期待できる。」「生徒の状況をよく踏まえて、生徒本意の事業実施となっている。理数科学科の探究活動全体のルーブリックを作成して現状を把握し問題点を見いだして対策を講じていることは、評価できる。」などの良い講評をいただいた。一方、「課題研究の質を高めるような手立てを普段の授業改善と結びつけて実践することが期待される。」と要望された。理数教育のさらなる充実を目指し、理数科学科の生徒だけではなく、人文社会科学科、普通科を含む生徒全員に対して生徒の主体性が発揮されるような工夫された教育を目指し、教科横断的な教材開発、探究科学科1年で行っている『探究モジュール』を普通教科でも行えるように改良することが課題である。SSH中間評価および昨年度からの課題等を踏まえ、具体的重点目標として5分野10項目の目標を掲げた。

概ねどの分野においても目標を達成できた。特に、「学校行事・部活動の充実」は昨年度までコロナで制限されていたこともあり、今年度体育大会、コーラスコンクールともに実施できたので生徒の満足度は大変高かった。

一方、「体力の向上」においては昨年度よりも向上した割合が低かった。生徒の入れ替わり、測定時の天候などの要素もあり、原因は分からないが、今後注視していく必要がある。

スーパーサイエンスハイスクール指定後、難関大学の志願者が年を追って増えてきており、合格者数も増加している。特に、『探究モジュール』開発後、伸びてきており、ユニット学習の効果が感じられる。今年度は本校の普通科だけでなく他県のSSH指定校へ紹介したり、説明会を開き、県内の高校への波及に取り組んだりした。

7 次年度へ向けての課題と方策

本校は32単位で授業を編成している。新課程では情報が共通テストに導入されることもあり、特に探究科学科における情報の指導が懸念されている。次年度は探究科学科1年生で基幹探究を3単位から1単位減じる予定である。探究科学科での探究活動については、一部を普通教科に移行しながら、行っていくことが課題になる。生徒全員に対して生徒の主体性が発揮されるような工夫された教育を目指し、教科横断的な教材開発を行ってきたい。

重点目標が毎年同じであり、マンネリ化してきている。重要であるからこそその目標であり、また定点観測の意味もあるが、新たな視点で目標を設定し、取り組んでいきたい。

生徒の学力向上を目指すことはもちろん、学校行事や部活動の充実を継続して図り、健全な心身・優れた知性・豊かな情操を培い、民主的で自主性・創造性に満ちた人間の育成に努め、生徒・保護者・地域・社会の期待に応えるとともに、「新しい社会を共創し、未来の世界と日本をリードしていく生徒を育成する」ために、「計画・実行・検証」の学校評価システムを確立し、充実した教育活動を展開していきたい。